

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	夢の中の道化
Author(s)	高橋, 富幸
Citation	龍南, 246 : 68 - 79
Issue date	1940-03-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8399
Right	

夢の中の道化

理三甲三 高 橋 富 幸

何故彼がこんなに深く、私の心にシミを残して行つたのか私は今でも分らない。それは私も彼も共に両親のない孤兒だと打ち合けてからの交際だつた。理科に自分から望んで這入つて置きながら、型にはまつたカン詰めの様な大抵の學科に、どれにもこれにも親しめないで、私は三脚を持ち歩いて繪ばかり書いてゐた。山で、野で、河原で、私が繪になりそうな景色を漁り歩いてゐた頃、彼と私は不思議な程度に出會つたものだつた。彼は何時も着流しで、繪筆も持たず、寫眞機も手にせず、只漂々と夢遊病者の様に歩いてゐた。

私達が余程親しくなつてから何時か彼は、私を評して、俳句の様な口調でこんなことを云つた。

「うつかり、だんまり、お人好し」

私は實際お人好しだつた。彼に誘はれて、一緒に酒も飲み、遊びもし、随分無理な金の無心も斷はり切れず度々聞いてやつた。

彼は私達のクラスでも最年長者らしく、二三度落第したとのことで、學校には殆んど出て來なかつた。私達が昨年の新學期に初めて知り合つてから、私は随分澤山の彼についての奇矯な行ひや、身の上話し等を聞いた。だがそれを一々此所に書き上げるのは大變だし、お人好しの私には了解に苦しむ點も多々あるので、私はこんな話しは一切抜きにして、私の夢の中に登場して來た彼のことだけを書き留めて置かうと思ふ。これは恥を曝す様な變な話しだけれど小さい

時から私は、夜の庭で踊る小人達や、池の底の赤鬼青鬼の存在を實在の様に信じ切つて、現實と夢とを混同して育つて來たので成長した現在でも、現實に經驗する事柄を、そのまゝ夢の中に引き入れることを何の不自然も感じないで平氣でやつてのける習慣を、持つ様になつてゐるので、何時も暗い影を背後に曳いてゐる様な彼の存在は、その頃屢々私の夢の中に這入りこんで來たものだつた。

○ ○
づんぐりした滯茶色の皮膚をした動物學の授教の説明が終ると、生徒達は銘々蛙を一匹づゝ持つて自分達の解剖臺の方へ散らばつて行つた。私は取り殘された頑丈そうな雌蛙を一匹ピンセットでぶら下げて解剖皿に仰向けに四肢を釘付けにした。クロロホルムで魔酔させられただけのその蛙は未だ生きてゐるらしかつた。白々と膨れた腹部の皮膚や、太い肢の筋肉を默然と眺めながら、私はメスを取り上げた。そしてぽこ／＼したゴム膜の様な表皮を剝がして、美しく青みがかつて見える皮下靜脈を見た。死体とはこんなにも無邪氣なものか、と私はいぶかりながらふと死んだ人間の湯棺の時の光景を想像してゐた。この時私の不意を突く様に蛙はびっくりと身を振らせた。生來臆病者の私はどき／＼する鼓動を押し靜めて顔を顰めながら、缺みの尖端を下腹部に突き刺してごし／＼と口の近くまで切り開いて、切り口の兩端を針で止めた。そして課せられた通り靜脈系を見るために、色とり／＼の臓物を側らに押しやつて、心臓に這入つてゐる血管をあちらこちらと探り出すことに夢中になつてゐた。だが蛙はこの時やにはに／＼と片脚を縮めて、針を一本取りはづし解剖皿の水をゆらくと搖がした。私は思はず及び腰になつた腰を再び落ち着けて、材料を取り變へるのも嫌だつたので、意固地になつて、はづれる度に増々強く針を刺しこんで實驗を續けてゐた。私が愈々下行大靜脈を見る爲めに消化管の下にもぐり針を入れた時だつた。蛙は今度は禪身の力をふり絞つて、パチャリとすさまじい水音をたて、四ツの針をすつかり取りはづして終つた。水しぶきがさつと私の頬にかゝつた。私は飛び上つた。私の椅子はがた

んと音をたて、後ろに倒れ、生徒達は私の周圍に人垣を作った。蛙はこの衆人環視の中で徐ろに身体を動かしてごろりと解剖皿の上に起き直った。——そして、内臓が腹部からはみ出してゐるのにも、悲鳴を上げることにも一切無關心に、その金色に縁取られた目を見張つて、唯岩石の様にじつとうづくまつてゐるのだつた。

——私が、長々とこんな話を彼に話してゐる間、彼は、床に横たはつて黙つて聞いてゐた。時々彼は腹這ひになつて枕下に引き据えた酒をちびり／＼飲んでゐたが、この時ばかりとこんなことを言つた。

「學者が間違つて動物に生れたとしたら、きつと彼等は蛙になるんだ。」

「藁と云ふのは、あれは道學者だよ。」

彼の部屋には一升瓶が四五本轉がつてゐてその中の空瓶の一つに水仙の花が一つ木に竹を接いだ様に刺さつてゐた。外では風が吹いてガラス戸がごと／＼揺いでゐた。

私は彼に奨められて、あるだけの酒を——尤も大部分は彼が飲んだのであるが——二人して全部飲み盡してしまつた。彼は突然私に、

「君、手を出してみろ」

と云つた。そしてさし出された私の手と彼の手とを掌でペタリと食つ付け合して暫らくそれで眺めてゐた。彼の手はかさ／＼と節くれ立つて、子供の手の様な未熟さが未だ多分に残つてゐる様なども小さい手だつた。——それと喰つ付け合はされた私の手も大いさに於ては殆んど彼の手と變らなかつた。

彼は吐き出すやうに言つた。

「君、手の小さいのは把摑力の弱い証據なすだ」

そして、側らの水仙の花を、飽つ氣に取られてぼんやりしてゐる私の目の前で、むしゃ／＼と食つてゐた。終ひには

彼はこんなことを口走り出した。

「俺だつて、生きてゐたいぢやないか！」

「この科白は面白いよ」

「俺だつて生きてゐたいぢやないか！」

外では未だ風が吹いて窓ガラスがゴト／＼音をたてゝゐた。

○

○

冬休みになつて故郷に歸る時、私は彼の下宿を訪ねた。彼は學期試験の始まるずつと以前に國に歸つたとの事だつた。私は自分の家に歸つてから受験の準備や何かで、少しも能率の上らないぼんやりした毎日を送つてゐた。その頃私はよく彼の夢を見た。彼の生國は四國の伊豫の國だとの事だつたが、夢の中で私は一度も行つた事のない四國の彼の家に、彼を訪ねて行つたものだつた。

彼の家は黒い板塀で圍れた、苔の生えた冠木門のある廣大な構えで、鬱相と樹木が生え茂つてゐた。

「藤堂達三郎」

と風雨に曝された門札を眺めて、私は彼が兩親も姉弟も居らないこのがらんとした家の中に孤りで住んでゐることを今更の様に思ひ思した。

私が彼の部屋に通ると、彼は前屈みに椅子に腰掛けて熱心に顯微鏡をのぞきこんでゐた。側にはフラスコや試験管や變壓器やそして、真空放電をやるへちまの形をしたブラウン管等が防狭いまでに並んでゐた。「何をしてゐるのだ。」と私が尋ねると、

「血液に陰柱線を投射した有様を見てゐるのだ。」

と彼は答えて私に向つてこんな説明をした。

「君、血液は一つの組織なのだ。それは凡そ三〇〇、〇〇〇億の赤血球と五〇〇〇億の白血球を含んでゐるそうだ。この多數の血球を包含する血醬に、眞空放電の際陰柱から放出される陰柱線を當てると、この陰柱線はそれに當つた物質の悉くに陰電氣を帶び亡せる性質があるのだ。だから、いくらか鹽基性だが電氣的には中和の状態にある血液は、この陰柱線を受けると電氣分解を起してイオンを生じるので此所に何か特別である觸媒を持つてくるならば、或る特殊な化學變化に依つて、我々が成長するに従つて外界から取り入れた血液中の不純な成分を悉く取り除いて終ふことが出来るのだ。そして我々人間をこの成長した現在の状態で而も全々新しい我々が生れたばかりの組織をもつことが出来るのだ。」と云つた。

「そんな馬鹿な事が！」と私が笑ひ出すと、彼も愉快そうに笑つてゐた。

暫らくして彼は「裏の果樹園の塀を修繕するから手傳つてくれ」と云つた。私達は塀の上に登つてコツ／＼と鋤の音をさせてゐたが、私は先刻から何處からともなく果樹園の中に這入りこんで来て、車座になつて盛んに何か議論し合つてゐる乞食達の方にばかり氣を取られてゐた。彼等を私は、最初は乞食だとはかり思ひこんでゐたが、よく容子を見ると、彼等は何れも堂々とした身なりをして居るし、話してゐることも何だか立派な一言言をなした議論らしいので、私は彼に「彼等は何者だ」と尋ねた。

「ありや、重臣達だよ。」

と彼は嘯いてゐた。

今度私が彼等の方を見ると彼等は何時の間にか彼等の車坐の中央に水の美しく澄んだ、大きな深い池を作つてゐて、
々 談した結果作り上げた動物の形をした玩具の様なものを、その池の中に投げ入れるのだつた。すると池の底に

は素晴らしく巨大な鰐魚の様なものゐて、投げ込まれた動物が水底に達すると同時に、片つばしからそれをばり／＼と噛み碎いて終ふのだつた。彼等は再び會議を始め、新しいものを投げ入れては、又それが噛み碎かれるのを放心した様に打ち眺めてゐた。この時私は塀の上で、譯の分らない衝動に馳られて彼等の車坐の近くへぼーんと勢こんで飛び降りた。だが私の足が地に着いた瞬間誰かに大きく金鏡でごつんと一つ頭を叩かれて私は氣を失つてしまつた。それから何れだけ時間が経つたのか私が再び目を開いた時には、先刻の車坐の人々は誰も居らず、池の水面はしーんと静まり返つて、あの動物の玩具も、鰐魚も切れ片一つ見當らなかつた。するとやがて、私のぼんやりした視野の中で、池の彼方の葉陰から突然まぶしいばかりの、全裸の美女が出現した。女はしづ／＼と池の岸に近づいて水鏡に姿を寫してその長い髪を櫛けづり始めた。圓く柔かく脊を曲げて、美しい手を余念なく動かし續けてゐるその横顔を、貪る様に一心に眺めてゐた私は、遂思ひ切つて、女の側に走り寄つた。女は私を見ると直ぐ身を翻へして池中に飛びこんだ。女の後を追つかけて水中に突進した私は水の中で身を振らせて藻掻く女を心死と抱きしめた。だが女の感觸は魚の腹の様に冷かつた。――暫らくして、すーつと力が抜けた様に水面に浮び上つた私は長々と伸び切つた形で塀の上を見上げると、其所に彼は、冷笑と侮蔑で満ちた白く光る目をして私を見つめてゐた。

「馬鹿な！　ありや人魚だよ。貴様達の戀の對象がこんなものだよ！」

それから二三日して私は又、彼の夢を見た。それは彼の告別式らしかつた。――何故なら私は白い布を被せた骨霊の前で、汗を流して縋々として彼への弔詞を讀み上げてゐたのだから――。突然私の目の前の骨霊が叫び出した。

「畜生！　止めろ！　貴様と云ふ奴は思ひ切り了見の狭い、圖々しくうぬぼれ切つた、頭の悪い、おつちよこちよいだ！　その貴様の假面を被つた汚いかさぶたを一枚剝いで俺の骨霊にくつ付けるとは！　馬鹿！　消えて失せろ！」

私はがら／＼と散亂して轉ろがり落ちる骨片が私の脊中に石礫の様にびしり／＼と打ち込まれるのを意識しながら、夢中になつて逃げ出してゐた。

○
○
年が改つて私達の最後の學期が始まつた。彼の姿は學校には何時迄たつても見えなかつた。年末から風邪をこじらせて私は、空の風の砂埃りの中に出て行く度によく熱が出た。その日もかさ／＼に干燥した空氣が砂埃りで掻き廻されて空虛がす／＼と腹の中に吹き抜ける様な私の最も嫌な天氣だつた。告示板の前で私は彼の死亡通知を發見した。

理科三年生徒 藤堂達三郎

十二月廿七日死亡

私はこの二行の文字を無表情に暫らくぼんやり見つめてゐた。私達のグループの一人が何か私に話しかけてゐるのに黙つてそのまゝ教室に這入つた。

その夜私は彼と同郷だと云ふ數學の教授の家に掛けて行つた。白いエプロンをした丸々と肥つた女中が私を二階の書齋に案内してくれた。教授の應接机を兼ねた疊の二疊敷の廣さもある様な大きな机の上には書籍や、手紙や用紙、新聞紙、雜誌類が雜然と臆面もなくこの廣大な面積を埋め盡して、それ等の間隙にペン、マジヨリカ皿、煙草、その他無數の細々したもの、思ひ／＼の場所に散らかつてゐた。私は赤々と炭火の這入つてゐる大きな瀬戸火鉢に手をかざしながら、煙草を吸つた。階下では乳呑兒をあやす奥さんの聲や、とん／＼と太鼓を叩く音、それに混つて子供の話し聲や女中のころ／＼と笑ふ笑ひ聲などが切れ／＼に聞えてゐた。私は所在なく再び机の上を見廻して、このごた／＼した雜多な色の配合が全体として見ると、如何にも心持よげに調和してゐるのを發見した。だとすれば教授は生れながらの美術家かもしれないと變なことに感心した。だがふとこの時私は机の隅のこの書籍の山の陰に、見なれない奇妙な硝子

瓶を見つけ出した。それは小さいへうたんの形をしてゐて中央部が細く絞れて中に透明な液体が這入つてゐた。手にとつてこの奇態なものをいちくり廻してゐた時だつた。階段をこゝ手をついて四つ這ひに上つてゐる様な音がして、そろりと開いた「ふすま」の陰から可愛いお河童頭がちよろりとのぞいて直ぐ消えた。今度は丸々と肥えた男の子の顔が出て直ぐ又引つこんだ。暫らくして再び二つの顔が同時に重なり合つてふすまの縁からのぞいた時、私はニコ／＼と笑つて見せた。二人は這入り口にちんと坐つて頭をこくりと下げてお辭儀をした。私が「今晚は」と云つた時にはもう二人は私の前に坐つて火鉢に小さい手をかざしてゐた。

「お父さんは何處へ行つたの」

と私が尋ねると

「お風呂へ行つたの」

と女の子が答へた。教授が瘦せて細長いのに似ず、この子は圓顔の櫻色の頬に、くりつとした涼しい目をして口が心持ち少し大きかつた。女の子は答への續きでもあるかの様に勢ひこんで、

「あのね、お腹から食べてね、そして脊中から吐き出すもの何ーんでしょ」

と云つて身体を樂しさうに揺すつてゐた。私はのこ／＼二階迄子供達が上つて來たのはこの爲めだつたことが分つて笑ひながら、

「それは、大工さんのカンナだらう。」

と答えた。女の子は一寸がつかりした恰好を見せたが直ぐ又早口に始めた。

「それぢやね、頭がー蛇で、頭がー」

こゝで男の子が「和歌子さん僕が云ふ。」と後を引き取つて、

「あのね、頭が蛇で胴が竹で足が金のもの、何でしょう。」

と尋ねた。私は「ふーん」と暫らく考へる振りをして、

「解らない。」

と答えると女の子が、「それはお父さんのステツキよ。」と云つて二人はニコ／＼笑つた。

この時奥さんがお茶を入れて上つて来て、「先刻錢湯に出かけたけれども歸つて来るでせう」と云つて暫らく話して、子供達を「もう寝む時間だ」と階下に連れて行つた。

私は又一人でぼんやりしてゐたが、やがて玄關ががらりと開く音がして教授のよく響く低聲が何か二言三言話してゐるのが聞え、どす／＼と悠々した足取りが階段を上つて来て、

「やあ」

と入口で親しいとも無關心ともつかぬ言葉をかけて教授は私の前の大きい坐蒲團に坐つた。

「長く待ちましたか」

「いゝえ、子供さん達と遊んで居ました。」

「さう」

教授は煙草に火を付けてそれ切り尋ねもしなければ話しもせず無心に煙をもく／＼と吹かしてゐた。

「藤堂は死んださうですね。」

と私が云ふと、「肺炎で死んださうだ。」と教授は答えて、先刻私がいちくり廻して側に投げ出してあつた例の硝子筒を取り上げた。如何するのだらうと見てゐると、へう、たんの下部に當る部分から液を全部上の筒狀の部分に移して終つてから、下部の氣體の部分の掌で握つてゐた。すると氣體が掌の温度で膨脹して中央の絞れた部分の小さい穴からぶくぶ

くと水泡が立上つて、よく見るとその上部の液の這入つた筒の中には小さいガラス玉の人形があつてそれが下から氣泡が立上るにつれて壁に當つてこち／＼と踏るのだつた。私はその硝子筒を教授から借り受けて自分でやつてみた。教はつて見れば何の事はない空氣の膨脹を利用した、踏り手なのだが、私はこの狭い筒の中で、手を振り足を上げ餘念なくこち／＼躍つてゐるガラス人形を長いこと見つめてゐたものだつた。教授は、

「それは藤堂が昨年の夏休みに、夜店で見付けたと云つて持つて來てくれたよ。――あの男は何も生み出すことの出来ない透明な混沌物だ。」と話した。

私は下宿に歸つて大分熱のあるのを知つて直ぐ床に就いた。熱に浮かされると私はよく夢を見るのだが、この日も又彼の夢を見た。

○ ○

彼は私が教授の家で見たあの硝子筒の中で、楽しさうにこち／＼踏つてゐた、私を見るとニコリと笑つてこんなことを云つた。

「君、一寸來て見給へ。面白いものを見せよう。數學と云ふのはあれは完全な空費なんだ。だが、それは美しい透明の世界だよ。驚ろくべき生の流れの靜止した形式的死滅だ！

私は素晴らしい數知れない美しいガラスの建築物を見せられた。數字達は兎や家鴨の様に楽しげに遊んだゐた。美しい尖塔、無限に大空に伸びた螺旋狀の階段、圓屋根、圓柱、ピラミット――此等は皆、開拓者達が、眞珠貝が眞珠を分泌する様に、水晶で作上げたものだとか彼は説明した。ふと空を仰ぐと遙かな大空から富士山の斜面の様に下に向つて延びてゐるピカ／＼光る平面があつた。――それは緩い勾配をなした子供の國の「滑り臺」の様なものゝ幅を無限に大きくした有様で、その中央に近い處で曲線が一度下に落ちこんで、再び上に登つて始めの傾斜を繼續して下に下つてゐる

た。だが私にはこの窪^{クボ}んだ部分が、全体的に少しも無理がなく、寧ろ全体の完全な美しさを一層強調してゐる様にも思はれた。

「あれは、氣体の狀態方程式だよ」

と彼は云つた。

私はそれから暫らくして、「直線を作るのだ」と云つて何處から始まるとも分らない透明などろ／＼した液体の一端を手につつて、夢中になつてそれを引き出さうとしてゐた。そして私は直線がする／＼と氣持ちよく伸びるのを快い氣持になつて得意氣に楽しんでゐると、やがてそれが何うかした機^{はり}に、すゝと水分が枯れる様に固結して、その瞬間に無殘にも私の直線はばら／＼の破片となつて跡形もなく消え失せるのだつた。私は泣き出しさうになつて再び同じことを繰返すのだつたが、どれも此れも粉塵^{チリ}盡の失敗に終つた。だがそれでも只もう懸命になつて同じことを繰返して、どれだけ時間が経つたのかふと氣付いて周圍を見廻してみた。するとどうだ、私の周圍は紙片一つない空の空で、私の頭骸骨の頂天に大きな空洞が、黒々とぼつかり口を開いてゐるではないか！。この時彼の姿は何處にも見えず。嘲けるやうな身も心も磨^ツり潰^ツされる様な聲で、

「お前の頭はがらん洞だ！」

「お前の頭はがらん洞だ！」

と云ふ囁^{ささ}やきが情容赦もなく絶望的に私の耳の中に射込まれるのだつた。私は氣も狂はんばかりの寂寥さに、ぎゆうぎゆう締め付けられて無我夢中に盲目滅方に必死になつて馳け出した。何處を何う走つたのか、何時の間に私は例の數學の教授の書齋に、透明人間の様に迷ひこんでゐた。そして某所に暖かさうに赤々燃えてゐる炭火を見て、始めてほつと生き返つた様に安心したのを私は現在^{いま}でもあり／＼と覚えてゐる。處で教授はその時私のこの安堵も知らぬ氣にあの

大きな机に、もたれ掛かゝつて、すう／＼と世にも氣樂さうに眠りこけてゐたものだつた。

翌朝目を醒ましてからも私はあの時くす／＼笑ひ出したおかしさと、その前に私が感じたあの深い安堵とを今更の様に、あれは夢だつたのかと氣付いた程だつた。

だが此の頃ではもう私も彼の夢は殆んど見なくなつた。私はこのつまらない夢物語りを此處で私自身の出鱈目な文句で結んで置かう。

梅が咲いた。

二月の玻璃窓に――

ぽつんと

一つ――。

毀れかゝつた小關橋コセキの欄干ランカンを

狂人の様に破壊し盡した

酔つ拂ひが 二人

梅の香りに

涙を流したのは

去年のあの頃――。